

[年度] 平成20年度和歌山県農林水産総合技術センター研究成果情報

[成果情報名] 露地栽培ナスにおける土着天敵ヒメハナカメムシ類の発生状況とアザミウマ類の密度抑制

[要約] 露地栽培ナスでは、薬剤防除の影響が小さいほ場ほど、土着天敵ヒメハナカメムシ類の発生が多くなり、重要害虫であるアザミウマ類の発生密度が低く抑えられる。

[キーワード] ナス、ヒメハナカメムシ類、アザミウマ類、薬剤防除

[担当機関名] 農業試験場 環境部

[連絡先] 0736-64-2300

[部会名] 野菜・花き（野菜作物）

[分類] 研究

[背景・ねらい]

アザミウマ類は果菜類の重要害虫で、殺虫剤に対する感受性が低いものが多く、薬剤散布のみで防除を行うことは難しい。一方、土着天敵ヒメハナカメムシ類はアザミウマ類の密度抑制に有効に働くことがわかっている。ただし、ヒメハナカメムシ類は農薬による影響を受けやすいため、個々のほ場での薬剤防除の程度（薬剤の種類や散布頻度など）によって発生状況やその働きが大きく異なると考えられる。

そこで、那賀地域の露地栽培ナスについて、薬剤防除の程度が異なる4ほ場（有機栽培1、減農薬栽培1、慣行栽培2）におけるヒメハナカメムシ類とアザミウマ類の発生状況を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1．葉ではヒメハナカメムシ類、アザミウマ類とも中位葉より上位葉の方が生息密度が高い傾向がみられる。
- 2．花でのヒメハナカメムシ類の生息密度は、有機栽培、減農薬栽培、慣行栽培の順に高く、アザミウマ類の生息密度は、その逆になる。
- 3．慣行栽培では、農薬散布を繰り返してもアザミウマ類の発生が多くなったが、有機栽培では、アザミウマ類の発生は極めて低く推移する（図1，2）。

[成果の活用面・留意点]

- 1．ヒメハナカメムシ類の発生状況は、使用する農薬の種類によって異なる。
- 2．防除薬剤の種類や散布頻度などを考慮して、土着のヒメハナカメムシ類を有効に活用すれば、効率的にアザミウマ類を防除することができる。
- 3．環境保全型農業の推進に資する。

[具体的データ]

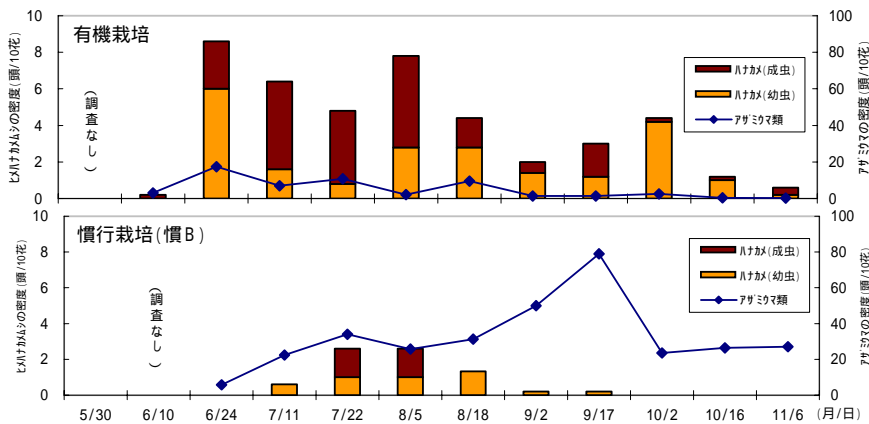


図1 . 花におけるヒメハナカメムシ類とアザミウマ類の発生状況 (2008年)

調査場所 有機栽培: 岩出市金池、慣行栽培(慣B): 紀の川市貴志川町国主

栽培概要 有機栽培: 品種「千両2号」、2008年5月7日定植、畝幅1.5m、株間75cm、シルバーマルチ、ソルゴ-障壁あり

慣行栽培(慣B): 品種「千両2号」、2008年5月26日定植、畝幅1.8m、株間60cm、黒マルチ、ソルゴ-障壁あり

調査方法 2週間隔で、50花における生息虫を花叩き法により計数した。

: アザミウマ類を対象とした農薬散布

アザミウマ類は、有機栽培はヒラズハナアザミウマ、慣行栽培(慣B)はミナミキロアザミウマが優占であった。

ヒメハナカメムシ類は、主にタイリクヒメハナカメムシ、ナミヒメカメムシが発生していた。

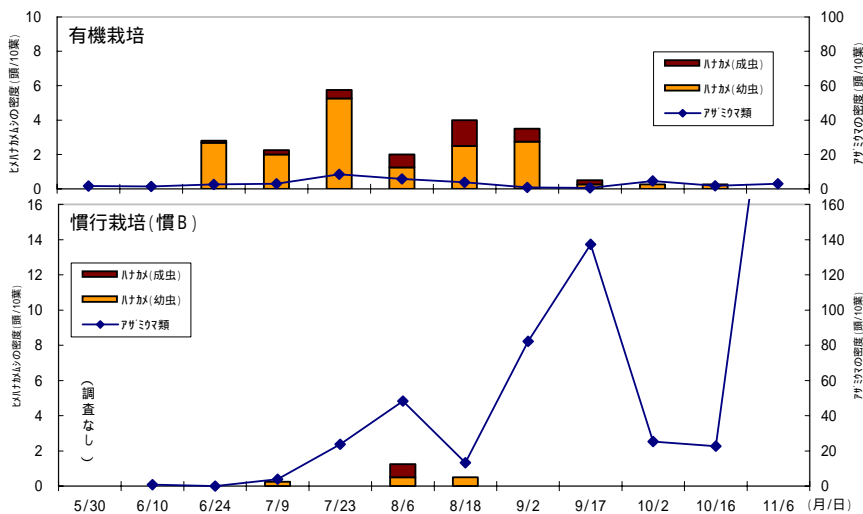


図2 . 上位葉におけるヒメハナカメムシ類とアザミウマ類の発生状況 (2008年)

調査場所、栽培概要は図1と同じ。

調査方法: 2週間隔で、上位葉40葉における生息虫を見取り法により計数した。

: アザミウマ類を対象とした農薬散布

アザミウマ類は、ミナミキロアザミウマが優占であった。

[その他]

研究課題名: 指標の候補を選抜するための研究 (農業に有用な生物多様性の指標及び評価手法の開発)

予算区分: 委託プロ

研究期間: 平成20~24年

研究担当者: 山田顕史、井口雅裕

発表論文等: なし